

修士論文(要旨)

2015年1月

短期訪日研修の役割
—アメリカ人高校生の場合—

指導教授 佐々木倫子 教授

212J3011

言語教育研究科

日本語教育専攻

近藤麻衣子

目次

第1章 はじめに	
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
1.3 用語の定義	3
第2章 先行研究	
2.1 短期訪日研修プログラム	4
2.2 中等教育段階における各プログラム	5
2.3 日本人対象の短期海外研修	6
第3章 研究概要	
3.1 短期訪日研修	8
3.2 期間とスケジュール	8
3.3 参加者概要	9
3.4 調査方法	10
第4章 アンケート調査	
4.1 調査と分析の方法	11
4.2 参加者の背景	11
第5章 アンケート調査から捉える参加者の体験	
5.1 プログラム体験	17
5.2 分析と考察	19
第6章 インタビュー調査結果と分析	
6.1 TEA/TEM 概要	31
6.2 TEM に関わる用語	31
6.3 調査協力者	32
6.4 調査方法	33
6.5 分析方法	34
第7章 TEM 図で見る Ken の人生	
7.1 第1期	36
7.2 第2期	46
7.3 第3期	51
7.4 考察	57
第8章 総合的考察と今後の課題	
8.1 総合的考察	59
8.2 本研究の課題と今後の展望	63

謝辞

参考文献・参考 URL・巻末資料

修士論文要旨

これまで日本語教育分野における異文化理解や異文化接触、異文化適応に関する研究は対象者をごく一部の長期異文化体験者に注目し、行われてきた経緯がある。しかし、異文化交流プログラムが短期化、一般化の傾向を見せる中で、短期プログラムの参加者を対象とした異文化理解、交流の在り方を捉えていく必要性があろう。こうした短期異文化接触研究は大学生対象のプログラムを中心に行われてきてはいるものの、中高生を対象とした交流プログラムについての研究蓄積は現在のところほとんどない。

そこで、本研究では短期交流プログラムに参加したアメリカ人高校生に焦点を当て、彼らの体験とプログラム参加の影響を把握する。同時に、プログラム自体を参加者の視点から捉え直し、こうした実際体験から得られる学びからパラダイムシフトが急がれる海外での中等教育機関における日本語教育への示唆を得ることを目的とする。

アンケート調査は 32 名からの協力を得た。参加当時の年齢は 17 歳が最も多く、70%が来日前の日本語学習経験があったものの、教室型での学習者はわずか 4 名に留まり、大半がインターネットを通じての独学者であった。現時点で、多くの協力者が大学に進学しているが、人文科学系に留まらず、理系の専攻者の中にも日本語を学び続けている者がいることが分かった。参加者は「日本の実社会の体験」や「日本の現代文化体験」、「自分の日本語力挑戦」、「新しいことへの挑戦」を参加目的として挙げており、「観光」や「旅行」を挙げた者は少なく、プログラム内容を理解した上で参加していたことが分かった。また、プログラム参加の「一番の思い出」として、「友人との出会い」、「自由行動」、「日本/異文化体験」の順にキーワードが挙げられた。一方で、「日本語」を挙げた者は一人もおらず、プログラム運営側の日本人スタッフや日本語教師と参加者間のギャップが明らかになった。日本人との接触に対しては特に同世代との接触機会が非常に好意的に受け入れられていたことが分かった。自由回答は佐藤(2008)「事例—コード・マトリックス」を分析方法として採用し、[出会い][直接体験][自己成長][将来設計][日本語学習]の 5 つがキーワードとして抽出された。

インタビュー調査は桜井(2009)の「ライフストーリー」を参考に 2 度のインタビューを実施、それを社会と時間の関わりと共に可視化できるサトウ(2009)や安田・サトウ(2012)の「TEA/TEM」を参考に TEM 図を作成し、分析の視点とした。協力者は現在、日本に在住している Ken (仮名) に依頼した。インタビュー調査からプログラムは Ken に本格的な日本語の開始と自分なりの生き方の発見という大きなインパクトを与えていたことが分かった。また、Ken がこれまでに育ってきた環境との関わりがそのインパクトをより強めていることも判明、プログラム参加が Ken にとっては大きな人生の分岐点になっていたことが明らかになった。また、プログラム修了後、Ken は社会との関わりの中で、さらに日本に将来住むという確信を重ねてきたことが分かった。

インタビュー調査とアンケート調査を通して、短期訪日研修は参加者に新たな出会いのきっかけ、「仲間」とのつながりを提供し、知識としての二次的情報の域を超え、直接社会に触れる機会、直接体験の場を与えた。また、日本語は実際使用機会の体験を通して学ばれ、異

文化に対する理解や人間的成長、自己成長を参加者は体得、将来設計を描くまでに至る参加者もいた。総じて、プログラムは異文化体験、異文化理解への第一歩としての機会をもたらす重要な役割を果たしていると言える。

構築主義・構成主義的教育の立場からプログラム参加者の人間的成長、つまり、「以前とは違う自分」と捉え直すと、箕浦(2003:付論第3節)の「ハイブリッド化」や細川(2000:23)や佐々木(2000:152)の「個の文化／個としての文化」と非常に近い考え方で捉えることができると言えるだろう。参加者たちは同じ体験をしていますが、その捉え方、解釈はこれまでに構築してきた「個の文化」によって、それぞれが独自の指標を持っている。そして、実際の社会や文化との相互作用はそれぞれの中で独自の深さや層、解釈で意味づけられ、新たな文化として加えられる。この新たな文化の構築プロセスはたとえ短い1か月間の体験であろうとも、海外の在留邦人子女や高校交換留学などの異文化適応者と多少重なる部分があると言えるのではないだろうか。

近年、グローバル化に伴い、中等教育段階における外国語教育の新たなシラバスやガイドライン作りが盛んに行われるようになってきた。しかし、実際の教室現場にまでガイドラインやシラバスの教育理念が行き届いているとは言い難い。これからの言語教育は言語や文化の知識レベルの習得のみに留まらない体験に基づく学び、学習者の文化の構築にまで広義に捉え直す必要があるだろう。また、プログラム参加者が最も求め、最も良い思い出として語った「つながり」の提供を外国語として日本語を学んでいる学習者へも積極的に試みていく必要がある。本稿では参加者の立場からプログラムを捉え直し、参加者の中でどのような位置づけをされているのか、また、彼らがどのようなことを学んでいたのかを捉えるに留まった。今後は海外の日本語教育同様、本研究もプログラム、特に日本語の授業について、実践段階へ落としていくプロセスをさらに考察していく必要があるだろう。

参考文献

- 浅井亜希子・箕浦康子・宮本節子(2013)「日本体験とキャリア形成：EPA 看護師の5年間の追跡から」発表配布資料より
- 大谷つかさ・福永達士(2014)「国際日本語キャンプ 2013」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』第11号, 国際交流基金バンコク日本文化センター, pp41-50
- 工藤和宏(2009)「日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グランデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察—」『スピーチ・コミュニケーション教育』第22号, 日本コミュニケーション学会, pp117-139
- 工藤和宏(2011)「短期海外研修プログラムの教育効果とは—再考と提言—」ウェブマガジン『国際交流』2011年12月号, Vol9, 日本学生支援機構
(<http://www.jasso.go.jp/about/documents/kazuhirokudo.pdf>)
- 国際交流基金日本語国際センター(2002)『Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century 21世紀の外国語学習スタンダード「日本語学習スタンダード」』日本語版翻訳:聖田京子「外国語学習スタンダード」
- 国際交流基金日本語国際センター(2013)『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版
- 国際文化フォーラム(2013)『外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』ココ出版
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房
- 桜井厚(2009)「ライフストーリーの時間と空間」『社会学評論』Vol.60, No.4, pp481-299
- 佐々木倫子(2000)「日本語教育と「文化」概念」文化をどう教えるか—日本語教育と文化リテラシー—『21世紀の『日本事情』日本語教育から文化リテラシーへ』くろしお出版, pp146-155
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社
- サトウ タツヤ(2009)『TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして』誠信書房
- 諏訪直子(2009)「JFL 高校生の異文化体験と日本語教育についての一考察」早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文概要書 (<http://www.gsjal.jp/kawakami/dat/suwa01.pdf>)
- Nida Larpsrisawad、前野文康(2012)「学習者はどう感じたのか—短期交流プログラムへの参加を通して—」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』第9号, 国際交流基金, pp89-98
- フレイレ・パウロ(2011)『被抑圧者の教育学—新訳』三砂ちづる翻訳 亜紀書房
- 細川英雄(2000)「崩壊する「日本事情」—ことばと文化の統合をめざして—」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第2号, くろしお出版, pp16-27
- 箕浦康子(2003)『子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究—』新思索社
- 村野良子(2001)『高校留学性に対する日本語教育の方法—言語学習と文化学習の統合と学習支援システムの構築にむけて—』東京堂出版
- 安田裕子, サトウタツヤ (2012)『TEMでわかる人生の径路 質的研究の新展開』誠信書房